

「多頭飼育崩壊」

家や施設などで飼っている犬や猫が、繁殖を繰り返すなどして増えすぎた結果、適切に管理ができなくなってしまう状況を「多頭飼育崩壊」と言います。



多頭飼育崩壊のイメージ図

想像を絶する悲惨な現場

「多頭飼育崩壊」問題は、近隣住民からの悪臭や騒音などに関する相談で発見されることが多く、調査に入った時には、最悪な状況に陥っている場合もあります。全国で発生したケースを見れば、放置された糞尿により皮膚はただれ、十分な餌を与えられず極限までやせ細った犬や猫が部屋に何十頭も押し詰められ、中には部屋の片隅に死骸が放置されていたというような状況も報告されています。

本町においても、悪臭や騒音に関する相談や飼い主からの連絡により、猫の多頭飼育崩壊が実際に確認されています。

年々増え続ける 近隣住民とのトラブル

多頭飼育崩壊により、悪臭問題や近隣住民への騒音、糞尿被害におけるトラブルが深刻化します。特に猫に関しては、犬とは異なり、行動範囲が広く繁殖力も非常に高いため、一般家庭の飼い猫でもトラブルに発展するケースが多くなっています。

被害が近隣住民の受忍限度を超えると判断された場合、民法上の不法行為責任（損害賠償）や退去を求められる法的トラブルに発展することもあります。

動物虐待と健康被害も

法的トラブルのリスクは近隣住民との間だけではなく、さまざまな飼育で動物を衰弱させた場合、動物愛護法違反（虐待・ネグレクト）の罪に問われる可能性もあります。

また、十分に世話が行き届かずに不衛生な環境下で飼育を続けると、ペットのみならず飼い主自身も感染症のリスクを負い、生活環境を著しく悪化させ健康被害が発生することになります。

「やさしさ」だけでは 育て抜くことはできない

多頭飼育崩壊の原因として、主に「不妊去勢手術の知識不足」「飼い主の経済的困窮」「社会的孤立・高齢化」が挙げられます。

また、捨て猫を発見した老夫婦が、「このままでは可哀想だ」という思いから、何の知識もないまま飼いつづけた結果、多頭飼育崩壊を引き起こしてしまったというケースも報告されています。

多頭飼育崩壊の予防として、特に不妊去勢手術は有効な手段となりますが、費用がかかるだけでなく「去勢手術をするのは可哀想」という考えから手術を行わない飼い主もいます。

ペットは、一時のやさしさだけでは育て抜くことはできません。飼い主は、その命に対しての責任があります。知識不足や経済的な理由で望まれずに産まれてしまった「可哀想な猫」を増やさないためにも、飼う前の準備は大切です。猫を飼う前に、自身の環境をしっかりと把握した上で、飼い始めたその命に対して責任と愛情を持たなければなりません。

すごすぎる猫の繁殖力

猫の繁殖力は極めて高く、生後4カ月～1年で妊娠が可能になります。犬などとは異なり、交尾の刺激で排卵が誘発されるため、交尾が成立するとほぼ100%の確率で妊娠します。1回で4～8頭を出産し、さらに出産後2カ月で次の妊娠が可能になるため、1頭のメスから1年で20頭以上増える繁殖力があります。



名もない猫に 幸せはあるのかな。



吾輩は猫である。名前はまだ無い。
どこで生れたかとうんと見当がつかぬ。
何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。

夏目漱石・『吾輩は猫である』より

町を歩けば、どこにでもいる猫。
首輪もしていなければ、名前もなさそう。
私たちは、そんな猫たちのことを
「野良猫」と呼びます。

どこにいても見かける野良猫。その猫たちの
ルーツをたどれば、きっと私たち人間が
深く関係しているのではないのでしょうか。

猫を見かけたとき、

あなたはどんな感情を抱きますか？

「かわいい」

「庭が猫のフンだらけで困る」

「可哀想だから家に連れて帰りたい」

「汚いから触っちゃだめ」

猫が好き、猫が嫌い。感情はさまざま――。

そして、近年は猫に関するトラブルが深刻
化するケースが増えつつあります。

「多頭飼育崩壊」が代表的な例です。

猫は、本能のまま生きる動物。

そんな猫の生態を知っていますか。

名前のない「野良猫」を増やすことなく、
目の前にある命としつかり向き合うことが
飼い主の義務です。

野良猫から見えてくる、私たちの地域のさ
まざまな課題。

今回は「猫」をテーマに、身近な社会問題
について一緒に考えてみたいと思います。

